

## ・一目均衡表とは

一目山人 1898年（明治31年）～1982年（昭和57年）  
都新聞（現在の東京新聞）商況部長を経て株式評論家  
実質的な活動は昭和30年代後半まで、44年に一目均衡表第一巻を発行してからは、独自の  
方法論の普及に専念  
以降全7巻の一目均衡表を出版（経済変動総研より4巻まで再版）

現在皆さんが目にする均衡表は一目均衡表原著第一巻に基づくものであるが、その原型は戦前の都新聞紙上に発表した「新東転換線」である。

この「転換線」の考案には個人的に随分な苦勞があったとのことであるが、相場理論の確立後「基本数値での半値関係」を日々記すことは一目山人にとっての習いとなった。

この点から推察すれば均衡表とは本来、基本数値での半値関係を表す「表」であることもわかる。

**基本数値は9と26を絶対数としてこれらの組み合わせで導き出される数値である。**

**9、17 ( $9 \times 2 - 1$ )、26、33 ( $17 \times 2 - 1$ )、42 ( $26 + 17 - 1$ )、51 ( $26 \times 2 - 1$ )**

**65 ( $33 \times 2 - 1$ )、76 ( $26 \times 3 - 2$ ) 等いくらでもあるが、実際に数えて経験的にこ**

**れらの意義、意味を理解して頂きたい。**

現在皆さんが目にするチャートのうち均衡表とは厳密には基準線と転換線を指すのであるが、より大きなスパンでの半値関係を先見せしめる二本の先行スパン、そして均衡表と互いに補完しあう遅行スパンを含めて一目均衡表と称するのである。

**転換線 過去9日間の高値、安値の半値を日々記した線**

**基準線 過去26日間の高値、安値の半値を日々記した線**

**先行スパン（上限） 基準線と転換線の半値を26日将来に日々記入した線**

**先行スパン（下限） 過去52日間の半値を26日将来に日々記入した線**

**遅行スパン 日々の終値を26日過去に日々記入した線**

ここでは日経平均株価の図1日足の均衡表グラフと図2月足（終値ベース）の均衡表グラフを添えるが、各線の具体的活用は別として次の点を徹底されたい。

- ①一目均衡表各線は上げ相場では「押し」下げ相場では「戻り」として機能する
- ②一目均衡表各線は時に応じて「相場水準」として機能する

・一目均衡表の優れた特徴

①直感的に相場変動を把握しうる

均衡表各線は全て「押し」「戻り」として機能しやすい傾向を持つ  
従って一目見て大雑把に上げか、下げかを判断しうる。

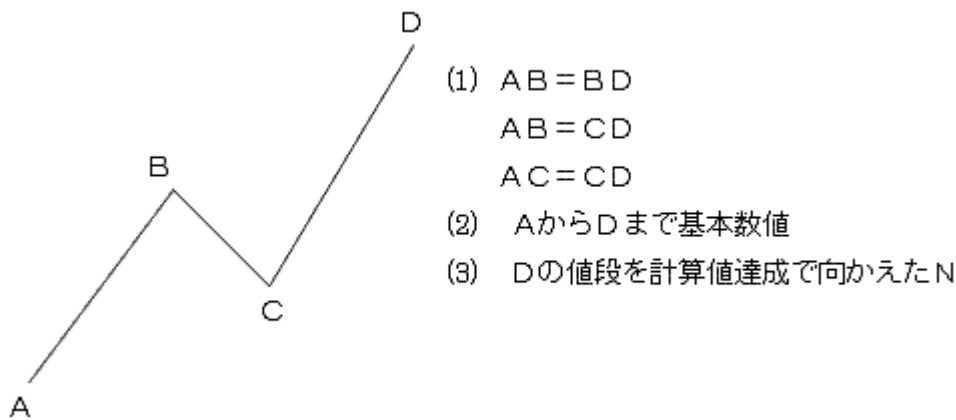
(日足、月足グラフ参照)

②直感を論理的に整理しうる (罫線のだましに対処し得る)

②は図表のみでは不可能、一目山人の相場変動論による。

全ての説明は無理なのでここでは2点のみ簡単に

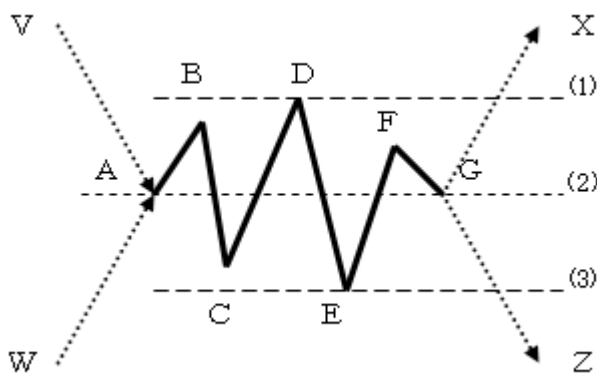
(A) 上げ相場も下げ相場も三波動構成を成す



(1) は相場の高値、安値を中心とする対等数値によるもの (2) は前述の基本数値、(3) はABの値幅をCに足したN値、Bに足したE値、BCの値幅をBに足したV値、ACの値幅をCに足したNT値を指す。

Dからの押しが上げ相場の限界 (主として均衡表) に留まる時には新たにCを起点とした三波動、あるいはADを第一波動とした三波動構成を成すものとして捉える。

(B) 押し、戻り、天井、底、は全て一種のモミアイである



モミアイ相場を (2) を相場水準とした騰落と捉えればAからGまではモミアイで

ある。このモミアイを軸に据え、相場変動のあり方を整理すれば

W→AG→X      Eは押し目

W→AG→Z      Dは天井

V→AG→X      Eは底

V→AG→Z      Dは戻り

の4つしかありえない。

この時、相場水準（2）の値段をはじめてつけたAからの時間関係には次の顕著な特徴が見られる。

基本数値でB、D、Fなどの高値、C、Eなどの安値をつけやすい

基本数値でAと同水準になりやすい

AからGまでが基本数値になりやすいならば、放れのポイントGでは相場実線と、基本数値での半値関係は一旦交わる可能性が高くなる。

従って均衡表は相場の放れのポイントを明確にするための図表であることも理解されよう。

この（A）（B）二つの相場変遷における特徴と、均衡表図表そのものを併せて活用することで相場の「方向」そのものを明確に判断する事が均衡表の目的であるが、罫線の最大の利点は想定、判断の誤りを必ず罫線そのものによって確認、検証出来る点にある。均衡表の全てをはじめから理解し、活用することは出来ないが、上の点を整理しつつ工夫していけば必ずや益する点が見出せるであろう。

今は昔と異なり、パソコンでチャートを簡単に見ることが出来るようになっている。

しかし経験乏しき人、本当に罫線を売買の道具としようと考えている人は、一つでも良いから手書きで均衡表を書き続けてほしい。

直感は常に正しいものとは限らない。

理論もまたしかりであり、逸脱は相場の常であるからこそ最後は己自身の蓄積がものをいうものである。

経験を生かすには、経験以前の問題をいかに整理できているかも大事であり、心構え乏しき人の経験はなかなか将来にはつながらないものである。

また判らないことを恐れるべきではない。判る瞬間こそ相場で益するポイントであるが、それは「判らない」という自覚あってこそである。

その為にも手書きでグラフ作成をお願いしたい。

細田哲生